

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第158号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成21年12月21日

オグロシギ



2009. 8.16 石狩川・当別川合流点付近

撮影者 山本和昭(岩見沢市幌向)



も く じ

私の探鳥地 (57) 室蘭市測量山とその周辺
 札幌市西区 北山 政人 2

絶滅危惧種シマアオジをどう守るか (5)
 絶滅危惧IA類であるということ
 北海道環境科学センター自然環境部 玉田 克巳 4
 [閑話] 野鳥あれこれ「里ツバメ」
 札幌市北区 樋口 孝城 5

シマアオジ恋し 札幌市東区 大橋 晃 6

苫小牧でのマミジロキビタキ
 付：北海道の記録紹介 広 報 部 7

10年間の宿泊探鳥会の思い出 札幌市西区 蒲澤鉄太郎 8

野幌森林公園『自然ふれあい交流館』で
 写真展示会を実施しました。 広 報 部 10

北海道におけるアカハラの繁殖期の分布
 美瑛市 藤巻 裕蔵 11

探鳥会ほうこく 12

探鳥会あんない 16

鳥民だより 16

私の探鳥地 (57) 室蘭市測量山とその周辺

札幌市西区 北山 政人

個人的なバードウォッチング年間予定があるとなれば、9月、10月は室蘭でタカの渡りを見る事が多いです。もちろん、この頃は渡りのシーズンなので、シギ・チドリ類やガン・カモ類なども見てみたいし、フェリーの上からの洋上観察もいい時期なので、行きたい所は多数あり、時間はいくらあっても足りない、というのが現状ですが、今回は私の探鳥地として、室蘭の測量山およびその周辺からの秋のタカ渡りを中心に書いていきます。

太平洋に突き出た絵鞆半島、室蘭市の市街地近郊の測量山および、周辺の海沿いの緑に覆われた場所が探鳥地です。まず観察場所としては測量山の頂上、隣の女測量山の頂上、海に面したマスイチの展望台周辺があります。それぞれ観察に適している条件は異なります。測量山の頂上の見晴らしは良く、絵鞆半島全体を見通す事が出来るので飛んでいるタカを数えやすいのですが、気象条件によっては測量山の周辺を飛ぶ個体が少ない事もあります。また、テレビアンテナなどが林立し、野鳥観察のロケーションとしてはイマイチという見方もあります。展望台なので観光客の方々も多く訪れるので、そのような場所で大勢の間で光学機を並べて長時間滞在するのは問題もあります。海沿いの女測量山の頂上の方がロケーション的には上で、周囲は森に覆われた山の上なので、タカ類以外の鳥たちも見やすい環境です。また運が良ければ、渡り途中のカラ類の群などに、ハイタカやツミが攻撃をかけるシーンが目の前で展開される事もあります。チゴハヤブサも、小鳥を捕まえている様子を見かけます。狩りに失敗したタカが僅かな時間、至近距離の木の枝に留

まる事もあります。ツミの雄の成鳥を、そんな状況で見た事があります。

マスイチの展望台周辺もタカ以外の鳥たちが、渡りの前に続々集まる姿が見られ、この地で繁殖するハヤブサが近くで良く見られるなど、と素晴らしい探鳥地です。地図によってはマスイチセの名称になっていますが、これはアイヌ語で、一説によるとウミネコの家との意味だそうです。海沿いの断崖絶壁に面しており、付近の岩場ではウミネコやオオセグロカモメやウミウ、イソヒヨドリなどが見られます。海上の方に目をやると、沖合に、オオミズナギドリやハイイロミズナギドリのミズナギドリ類やトウゾクカモメ類を観察する事もあります。ヒヨドリの大群の渡りなどで、地球岬の方が鳥の渡りルートとして有名で、素晴らしい探鳥地ですが、測量山周辺やマスイチでもタカ類以外の鳥たちの動きを、この季節には、頻繁に見ます。日本国内または、道内で留鳥とされる種類も多く渡っていくのが見られます。メジロやヒガラの群れは良く見ますし、藪の中からはウグイスや、アオジなどのホオジロ類の地鳴きをよく聞きます。枯れ木の上にエゾビタキがいるのを見たりします。天気の良い日には上空にアマツバメやイワツバメの大群が見られます。秋も深まるとツグミ類の動きも頻繁になり、シロハラやマミチャジナイにも会えるかもしれません。カケスの群も見られますし、ホシガラスも見られています。また、最近では道内でも冬鳥として定着しつつあるミヤマガラスの群も見られています。

室蘭のタカ渡りは9月のハチクマの渡りから始まります。

年によって少々異なりますが、中旬にピークを迎えます。私の記録では一日にハチクマを80羽以上数えた事もあります。成鳥が早めに渡っていく傾向にあり、中旬を過ぎると、その年生まれの幼鳥が多くなります。数は極めて少ないのですが、10月に入って渡って行くハチクマも見かけます。無事に越冬地であるフィリピンやジャワなどに辿り着けるのか心配してしまいます。色々な色彩の個体のいるハチクマは、観察し応えがある、とでも言いたいでしょうか、その不思議な生態と同じぐらい、私の興味を引きつけてなりません。繁殖地と越冬地がはっきり分かれていて、長距離を渡って行くハチクマは渡りの時季が短い間に集中します。

ノスリ、ハイタカ属などのように日本国内でも越冬し、冬季は北から来る個体のいる種は長い期間において渡りが続きます。これらの渡りのピークは10月に入ってからですが、ハチクマの渡りの時季においてもある程度の数が見られます。ノスリは10月に入ると1日に200から400羽を超える事もあり、事実上、測量山のタカ渡りの主役でしょう。

ハイタカ、オオタカもこの地のタカの渡りの中心を成しています。前記の2種よりは数は少ないですが、ツミも確実に見られます。この3種の識別は、最近の図鑑などの文献の充実ぶりやデジタル一眼レフカメラの普及で、その場においても種の同定がし易くなっています。しかし、状況によってはハイタカ属の一種としておく方が無難な場合もあるでしょう。1羽だけで高高度を飛んでいると鳥の大きさも把握しにくくなります。雌雄によって大きさも異なりますし、特にハイタカは幼鳥によってはかなり羽衣に個体差があるので、私自身もハイタカ属の識別はとても奥が深いものだと、秋の室蘭に行くたびに実感しています。

トビもノスリと同数かそれ以上が渡って行くものと思われれます。ピークや時季が判断しにくいのですが、主に10月に入ってから、数十羽から100羽以上のトビのタカ柱もなかなか見応えがあります。

その他、1日に見かける数は少ないですが、渡りのシーズン中に確実に見られる種類はミサゴ、チュウビ、チゴハヤブサ、ハヤブサが挙げられます。観察地の環境を考えると、ハヤブサとミサゴについては、前者は留鳥、後者は夏鳥として生息している個体もいます。確認した回数は少ないですが、クマタカ、チョウゲンボウ、さらに晩秋から初冬にかけてはオオワシ、オジロワシの渡りも見られますし、その他の冬鳥の猛禽類の渡りも期待できるようです。じっくりと時間をかけて楽しみたい探鳥地のひとつであり、朝からお昼頃までで観察を止めてしまうのではなく、午後の時間帯も気象条件がよければ渡って行くタカたちが多数見られます。また、前記したように、その日の渡りを諦めたタカ類やハヤブサの狩りの様子が見られたりするので、観察時間は長いほど面白いと思います。夕方近くに、翌日の渡りに備えるノスリたちが測量山周辺の森の木々に続々と降りる光景に出合う事もありました。

私にとっては、天候に泣かされたり、シーズン中でもタカの渡りが一休みした状況に出くわしたりと、毎回必ず満足な探鳥をしている訳では無いのですが、これからも、タカたちとの良い出会いを求めて出かけるのが楽しみな探鳥地です。鳥以外では本州より風によってやって来た、タテハチョウ科のチョウ、アサギマダラが9月中によく見られます。双眼鏡でタカたちを追っていると偶然視野に入る事もあります。天候の良い日はかなり高い所を気流に乗って舞っています。長距離を移動し、渡りをするチョウとして有名です。この昆虫は全国的に見ても鳥の渡りルート、特にタカの渡る所でも良く見られているようです。タカの渡り観察はシーズン前に文献で勉強する事や、自身の記録や写真などで見られそうな種を予測するのも楽しいですが、身近な場所で一年を通してタカ類を観察できる場所を見つけると、さらに面白くなります。普段から飛んでいるタカ類を観察していると、大きさや特徴がつかみ易くなるのでお勧めです。



絶滅危惧種シマアオジをどう守るか (5)

絶滅危惧IA類であるということ

北海道環境科学研究センター自然環境部 玉田 克巳

2006年12月、環境省のレッドリストが改訂され、シマアオジが絶滅危惧IA類に指定された。危ぶまれているシマアオジの生息状況が、ある程度正当に評価されたと安心した。しかしそれ以前のランクは準絶滅危惧 (NT) である。絶滅危惧種への指定が遅かったのではないかと感じている人は、私だけではないと思う。今回はその辺のことをちょっと詳しく振り返ってみたい。

現在 (1997年から)、環境省が定めているレッドリストのカテゴリーには絶滅 (EX) から準絶滅危惧 (NT) までの6区分と、情報不足 (DD)、地域個体群 (LP) の合計8

表1. レッドデータのカテゴリー

絶滅 (EX)	
野生絶滅 (EW)	
絶滅危惧種 (Threatened)	IA類 (CR)
	IB類 (EN)
	II類 (VU)
準絶滅危惧 (NT)	
情報不足 (DD)	
絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)	

} 絶滅のおそれのある種

つの区分がある (表1)。このうち絶滅危惧IA類、IB類、II類が、環境省の定める「絶滅のおそれのある種」ということになっており、いわゆる絶滅危惧種ということになる。そして、準絶滅危惧 (NT) と情報不足 (DD) が、その予備軍と考えてよさそうである。希少な種を、各カテゴリーに分類する要件も、AからEまで詳しい基準が定められている。とくにA基準では、10年間もしくは3世代のどちらか長い期間の減少率が80%以上の場合をIA類、50%がIB類、20%がII類となっている。B基準では出現範囲や生息面積、C基準とD基準が成熟個体の個体数、E基準が個体群動態のシミュレーションができる場合の減少率などが定められている (環境省 2002)。シマアオジを当てはめると、約20年前と比べて生息域で70~80%の消失がみられ、減りはじめたのが1990年代であるから、約10年の間で減ったと読み替えることができそうで、IA類の基準Aにはほぼ合致している。この点では、IA類に指定されたことは、正当な評価を受けたと考えられる。

環境省は、1991年に最初のレッドデータブックを公表した。しかし、このレッドデータブックにシマアオジは掲載されていない。IUCNが1994年に新しいカテゴリーを発表して、環境省では、この基準に則って1998年6月に新しい鳥類のレッドリストを公表する。このときにシマアオジが準絶滅危惧 (NT) に指定される。そして2006年の3回目の改訂へとつながる。つまり、準絶滅危惧 (NT)

という絶滅危惧の予備軍であったシマアオジは、II類とIB類を飛び越えて、いきなりランキングトップに踊り出た形である。徐々にランクを上げていったのではない点が、「これでいいのか?」という疑問をいただく。この辺の経過をもう少し詳しく追いかけてみる。

シマアオジが減り始めたのは1990年代であるが、減り始めたのが90年代の前半なのか、後半なのかを詳しくみてみよう。日本で夏鳥の減少が話題になりはじめたのは、1990年代の前半である。夏鳥の減少を危惧する書籍、「夏鳥たちの歌は、今」が出版されたのが1993年である (遠藤 1993)。この本は、北海道から沖縄までのことを取り上げ、102人の緊急レポートと題したりレーメッセージという形で各地の夏鳥の惨状が綴られている。北海道からも10人が寄稿しており、これらの中には、当時シマアオジが生息していたであろう地域の方々もいる。しかし、この本の中にシマアオジという文字は出てこない。この書籍の執筆が、いつごろから始まったのか私は知らないが、1993年の数年前であろう。執筆者は、いずれもフィールドで鳥を丹念に観察している方々であるから、シマアオジが取り上げられていないということは、この当時、ほとんどの人がシマアオジの減少を危惧していなかったと考えることができる。つまり、この当時は、シマアオジは減っていない、あるいは減っていたとしても、それを感じられない程度のものであったと言えそうである。

前回までの連載で紹介したように、根室市春国岱の生息状況が明らかになり、論文として発表されたのは1997年で、調査自体は1995年から始まっている (川崎ほか 1997)。だから調査を行った川崎さんたちは、1995年以前にシマアオジの減少を危惧していたものと思われる。このころ私は根室に住んでおり、川崎さんとも親交があった。春国岱ネイチャーセンターは1995年4月にオープンしたが、レンジャーである川崎さんは準備のためにこの1年前に赴任してきたと記憶している。過去のデータを深く読み取り、当時の春国岱で何が起きているのか、その変化をいち早く感じていたということである。

さて、レッドリストの問題に話を戻す。ランク外からいきなりトップに踊り出たことは、行政側が、シマアオジをきちんと監視していたかどうかを疑いたくなる。しかし上記のような状況を考慮すれば、1993年当時、シマアオジの減少を危惧するものはいなかったと言えよう。よって1991年のレッドデータブックに掲載されていないのは、納得の行くことである。川崎さんは1995年にはシ

マアオジの減少に気がついており、春国岱のほかには走古丹など、道東の一部地域で調査を行うが、その実態を論文として発表したのは1997年である。レッドリストが改訂されるのは翌1998年である。バードウォッチャーの間で、シマアオジの減少に危惧を抱くものたちが増えてきて、日本野鳥の会北海道ブロック協議会が、各支部にシマアオジの調査協力を要請したのも1998年である。おそらく、この1998年の時点では、シマアオジの減少実態がごく断片的に見えてきたものの、面的な評価、全道的な評価がない。絶滅危惧種に指定するほどの根拠がなかったので準絶滅危惧種 (NT) にとどめたのであろう。しかし、今になって、データを掘り起こしてみると、本会の東米里の探鳥会でシマアオジが最後に確認されたのは1992年。日本野鳥の会札幌支部のモエレ沼探鳥会でも1992年。ワッカ原生花園では1997年である。1998年当時、各地でシマアオジの消滅が断片的に見えていたはずである。しかし、これらを面としてとらえることができていなかったと考えられる。

一方で、このころシマアオジは、植苗 (苫小牧市) にはまだ生息していた。福移 (札幌市) にもいた。探鳥会のデータを使って、消滅状況を数字で示していたら、消滅の割合が20%などという数字は、もしかしたら算出できたかもしれない。詳しい分析や信憑性のある情報がなかったということであろう。もしこのときにもう少し正確なデータ分析があったら……。

このように2006年の状況、1998年の状況を詳しく見れば、それぞれIA類、準絶滅危惧種 (NT) に指定されたことは、その当時の限られた情報の中で、ある程度正確に評価されて指定されていたと考えられる。では、準絶滅危惧種 (NT) が、次の見直しでIA類にあがってしまうことはやむを得ないことと片付けて良いのであろうか。IA類ということは、タンチョウやオジロワシよりランクが高いということである。レッドリストは単に生息状況をもとに、絶滅の危険度をあらわしたリストであって、ただちに保全対

策に直結するものではない (レッドリストと法令、保全対策については今後の連載の中でもう少し詳しく紹介する)。レッドリストの策定は2006年が3回目であり、これまで7~8年の周期で改定が行われてきている。しかし、カテゴリーを定義するいくつかの要件のうち、A基準では減少率を約10年の期間で評価することになっている。このことを考慮すれば、リストの見直しは、もう少し短い期間 (たとえば5年程度) で行った方が良いのではないかと思う。

また、もうひとつ大事なことは、個体数の増減や生息実態が的確に把握されているかということである。残念ながら、現在のレッドリストの見直し作業では、行政自らがこれらを監視したという結果は乏しく、研究者たちが独自に持ち寄った情報をもとに判断している部分が多い。環境省が行った自然環境保全基礎調査は、この連載の中でもたびたび触れているが、1978年に行われてから、次に行われた1997-2002年まで、約20年の開きがある。この調査は、これで、生息状況を面的に捉えられている点では、優れた調査であるが、調査の結果をレッドリストの見直しに活用していくためには、調査間隔がもっと短くなればいけないと思う。昨今、モニタリングサイト1000という調査が行われている。5年周期でモニタリングが行われることになっている。まだ結果が見えてこないが、これがレッドリスト見直しに活用できる形になっていくことを大いに期待している。

文 献

遠藤公男 (1993) 夏鳥たちの歌は、今 利尻島から西表島まで102人の緊急レポート。三省堂、東京。

環境省 (2002) 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—2 鳥類。自然環境研究センター、東京。

川崎慎二・加藤和明・樋口広芳・高田令子 (1997) 北海道東部・春国岱の繁殖期の鳥類相の変化。Strix 15:25-38。

【閑話】野鳥あれこれ「里ツバメ」

札幌市北区 樋口孝城

今年の夏、道南の江差町に行く機会がありました。街中では2種のツバメが見られました。ツバメとイワツバメです。今年80歳で、50年ほど前には自分の家の土間でツバメが営巣したことがあるという地元の人と話をしましたが、その人はツバメを「里ツバメ」と呼び、イワツバメと分けていました。小さい頃から鳥に興味があったようですが、喉が赤くて、民家の玄関先や屋内に巣を造るのが里ツバメ、赤い部分がなく、少し大きな建物の壁などにたくさんの巣を並べるのがイワツバメということで、極めて明確な区別でした。

愛護会の探鳥会などで見られるのは、ツバメ、イワツ

バメ、そしてショウドウツバメの3種ですが、まずは「ツバメが飛んでいる」から始まり、その後で何ツバメかということになります。それがツバメだった場合には「ただツバメ」と言わなければ混乱してしまうこともあります。「里ツバメ」という呼び方が許されるならば、「ただツバメ」よりずっといいですね。

お話を伺った人は子供の頃は江差より北の熊石町 (現在は合併して八雲町) の泊川というところで育ったのですが、そこでもツバメは里ツバメと呼ばれていたそうです。少なくとも檜山支庁中部一帯ではどこもそうだったようです。「里ツバメ」、とても暖かい響きです。

シマアオジ恋し

札幌市東区 大橋 晃



北海道でしか見ることの出来ない鳥として、最も魅力的な鳥は何かと聞かれれば、私は迷わずシマアオジをあげます。本州から来るバードウォッチャーの中でも、タンチョウやシマフクロウとともにシマアオジが人気のようです。

シマアオジの魅力は、何といっても遠くからでもはっきりわかるあの胸から腹にかけての鮮やかな黄色です。しかし私はそれ以上にあのもの悲しげな鳴き声をあげたいのです。シマアオジのさえずりは、聞きなしでは「父が恋し、母が恋し」というのだそうですが、誰がつけたのかわかりませんが、実にうまくつけたものです。そう思って聞くと本当にそのように聞こえてくるから不思議です。

あの鮮やかな黄色ともの悲しげな声を堪能し、カメラにおさめることが初夏の最大の楽しみでした。しかし近年シマアオジが激減し、札幌周辺では殆ど見られなくなりました。かつては石狩川の河川敷などでも手軽に見ることができましたし(写真1)、ウトナイなど日帰りで行ける所でも、毎年見ることが出来ました。ところが最近では、確実に見ることが出来るのはサロベツや稚内周辺など、道北地方に限られてしまいました。早くからシマアオジが姿を消した春国岱だけでなく、オホーツクのシブツナイ湖など、私がよく訪れていた探鳥地でも、近



写真2 2009年7月 サロベツ原野

大変タイムリーな企画であり、興味深く読ませていただきました。従来からいわれていた「激減の主たる原因が、繁殖地の北海道にあるのか、越冬地の中国などにあるのか」という点について、一定の方向が見えてきた感じがします。

1997年8月の毎日新聞で、シマアオジが中国南部で数十万羽が捕獲され、十万人もの人がお祭りを開いてこれを食べた、という記事に接した時には大変なショックを受けましたが、「野鳥だより」第157号の玉田論文では、さらに目を剥くような内容が紹介されています。インターネット上で紹介された中国でのシマアオジの密売情報や摘発事例をまとめたものですが、数字が半端なものではありません。「国全体で百万羽が売られ」「約十萬羽が列車の中で見つかった」「二万羽以上が広州で押収」などというのですが、数字の信憑性については多少の疑問符がつくものの、仮に一桁低くとも、おそらく北海道全体に渡って来るシマアオジの数を遙かに凌駕するものでしょう。

牧草地の問題など、北海道の側の原因も勿論重要な要素とは思いますが、湿原や牧草地と関係のない草原などでの激減を考えると、北海道の側だけで説明はつきません。ことは国際的な問題であり、アジア重視を掲げる新政権が誕生した折でもあり、日中二国間による共同調査など、大いに進めるべきでしょう。勿論我々シマアオジを愛する北海道のバードウォッチャーも必要な協力を惜しむべきではありません。

シマアオジのもの悲しげなさえずりを聞くと、絶滅の危機から救いを求める声にも聞こえてくるのです。我が国では北海道にのみ渡って来るシマアオジをこの絶滅の危機から救うことは、北海道のバードウォッチャーに課せられた責任といっても過言ではありません。



写真1 1999年6月 石狩川河畔

年はあまり情報に接しません。今年も7月にサロベツと稚内近郊のメグマ沼でお目にかかっただけです(写真2)。

シマアオジの激減によりやく危機感が高まり、絶滅危惧種ⅠAに指定され、激減の原因解明も行われ始めていますが、シマアオジが「幻の鳥」にならないために、徹底した調査が望まれます。

そんな折に、本誌連載の道環境科学研究センター玉田克己さんの「絶滅危惧種シマアオジをどう守るか」は、

苦小牧でのマミジロキビタキ

付：北海道の記録紹介

広 報 部



本誌前号（第157号）に藤巻裕蔵さん（当会顧問）による「美唄にマミジロキビタキ」の記事が掲載されました。記事末尾には『北海道で未記録である。』と書かれていますが、重要なことは、その前に書かれている『日本鳥類目録改訂6版によると』の部分です。日本鳥類目録改訂6版（以下、「改訂6版」を略）は日本鳥学会により2000年に発行され、日本で記録のある鳥種とその生息・飛来地、季節性などが記載されています。また、特に記録が少ない種については記録年月も一部加えられています。現在のところ、この目録が全国の、そして北海道の鳥類記録を考える上での基準になっています。

さて、マミジロキビタキについてですが、苦小牧在住の田中哲郎さんから、3年前（2006年）に撮影した当該種の写真と観察記録が寄せられました。藤巻さんの記事を見て、自分の記録の重要性を認識したとのこと。以下は観察報告の一部です。

場所は苦小牧市高丘にある北海道大学苦小牧研究林の林縁部で、自宅の目の前です。観察は2006年（平成18年）5月21日の午前9時半頃から午後2時頃までで、観察者は自分と家人（洋子さん：広報部注）の2名のみです。

3日ほど前から家人が窓からキビタキのような地鳴きとさえずりを聞いていましたが、キビタキはこの時期研究林では容易に観ることができるので、特に探もしませんでした。当日、双眼鏡を持って外に出たところまた声が聞こえたのでよく観たら、なんとマミジロキビタキでした。眉が白くて太くて、マミジロキビタキであることはすぐにわかりましたが、図鑑を見ながら、雨覆に大きい白斑があり、三列風切の外側の白色とつながっているのを確認できました。胸にわずかにオレンジ色があり、あとは下腹まで一様なレモンイエローでした。印象として、レモンイエローがなんとも上品な感じでした。次の日にはいなくなっていました。

掲載した2枚の写真は田中さんがデジスコで撮影したものです。白黒なので色はわかりませんが、元のカラー写真は上記報告にあるマミジロキビタキの特徴が十分に確認できるものです。なお、当会HPの野鳥情報伝言板にはカラー写真が載せられています（2009/10/05、スレッドタイトル番号1035）。

この記事の作成にあたり、前述の藤巻さんから、北海道におけるマミジロキビタキの記録として実際には以下の①～④を把握していること、将来的には日本鳥類目録



マミジロキビタキ 1



マミジロキビタキ 2

に採用されるだろうとの話をいただきました。また、記録を積み重ねておくことが重要との助言もいただきました。

- ①中標津 1985年6月に標識
- ②利尻島 1998年5月26日
- ③渡島大島 1992～1995年に8羽を標識
- ④釧路 2001年5月

これらの出典などについては藤巻さんによる「北海道鳥類目録改訂2版」（帯広畜産大学野生動物管理学研究室2000）および「北海道の鳥類」（<http://www16.ocn.ne.jp/~bonasa/>）に記載されています。

広報部の調べでは天売島でも記録があることになっています。当会会員で天売島在住の写真家である寺沢孝毅さんによる「島の野鳥」（北海道新聞社2000）に掲載されている「天売島における月別鳥類出現リスト（1982年～1999年）」を見ると、年は不明ですが5月に印が付けられています。本文中には写真が載せられており、「数少ない渡り鳥とされるマミジロキビタキも、天売島ではそう珍しくない。」とも書かれています。なお、同書の「利

尻島における月別鳥類出現リスト(1996年~1999年)のやはり5月に印が付いていますが、これは藤巻さんの②のものかもしれません。

北海道新聞社発行の「北海道の野鳥」(2002)には1988年5月に、寺沢さんが天売島で撮影した写真が載せられていますが、「島の野鳥」の写真と同じ個体かどうかは不明です。

北海道野鳥図鑑(河井大輔・川崎康弘・島田明英、亜瑠西社、2003)には、写真は掲載されていませんが、「松前町大島、天売島、利尻島など日本海側の島嶼を通過するほか、上ノ国町夷王山、函館市函館山など日本海側で主に観察される。」という記載があります。

また、かなりの確度はあるようですが写真などの具体的証拠に乏しいため個人情報域を越えられないものはいくつかあります。その中には札幌市豊平区や当別町でのものもあります。

以上から考えると、将来的にきちんとした記録が蓄積していったならば、北海道ではマミジロキビタキは「迷鳥」ではなく、「数少ない旅鳥」と位置づけられるようになる

るかもしれません。中標津や釧路、前号の藤巻さん報告の美唄、そして今回紹介の苫小牧を考慮すると、アジア大陸東北部などでの繁殖、マレー半島などでの越冬、その間の渡り時期に少数が日本海側のみならず、北海道各地を通過していく可能性があります。

これまでの記録は5月、6月の春の渡り時期に集中しています。でも秋にも、鳴きもしないので見つけられないだけで、実際には通過しているかもしれません。いずれにしろ、もしマミジロキビタキを目撃することがありましたら、是非ご一報下さい。

なお、日本鳥類目録については近い将来、改訂第7版が発行され、目下その準備中ようです。改訂7版においては、形式などが満たされていれば地域の野鳥関係誌掲載の記録も採用する方針と聞いております。「北海道野鳥だより」に掲載された記録も検討の対象になるかもしれません。会員の皆様がお持ちの記録の中には貴重なものが少なからずあると思います。たとえそういったものが含まれても、「私の探鳥記録」といったような形で「北海道野鳥だより」にご投稿されることを願っています。

10年間の宿泊探鳥会の思い出

札幌市西区 蒲澤 鉄太郎

平成12年7月、当会設立30周年の記念行事として道北のサロベツ・ベニヤ原生花園で宿泊探鳥会が開催されました。幹事会での話し合いや、会員の方々のご意見を伺うなどして、最も大きな記念行事としては、「私たちの探鳥会—探鳥会30年の記録—」の発行でしたが、宿泊探鳥会も是非ということになり、言い出しっぺの私が企画・立案、そして実施の責任者の立場につくことになりました。

この時の宿泊探鳥会は盛況のうちは無事実施できましたが、参加者の多くから、「せっかくだから毎年……」という声が多く、それではということで私も張り切り、以後、今年度でちょうど10回目(10年目)を数えることになりました。毎年の行事ということになってから、ずっとやらせてきていただきましたが、高齢にもなり、当初目的の10回も達成できましたので、区切りのいいところで、今年度を最後に役を降りさせていただきました。皆様にはいろいろとご協力を賜り、この場を借りてお礼申し上げます。

10回の宿泊探鳥会にはそれぞれの思い出があります。記憶をたどりながら各回のことを書かせていただきます。なお、各回とも貸切バスで、参加者は45名前後でした。それぞれの宿泊探鳥会について地図に示してあります。

1回目 サロベツ・ベニヤ原生花園(12年7月1日~2日)
宿泊:はまとんべつ温泉ウイング

できるだけ多くの会員が参加しやすく、あまり行ったことはないが知名度の高い所ということでサロベツ・ベニヤ原生花園にしました。多くの鳥やエゾカンゾウの花盛りに皆さん感動したようでした。それまでにない行事の試みとあって不安がありましたが、多くの方々のご協力により、まずは成功裏に終わりました。振り返ってみますと、これで以後の宿泊探鳥会の基礎ができたものと思います。

2回目 旭岳温泉(13年6月30日~7月1日)

宿泊:大雪山白樺荘

昼過ぎにロープウェイで姿見駅に着き、展望台で記念写真撮影後、それぞれ散策路に沿って探鳥しました。ギンザンマシコ、カヤクグリ、ノゴマなどを観察しました。次の日、体力のある人たちは天女ヶ原湿原まで登り、ホシガラスを見た人もいました。雨のため、大部分の方々は途中で引き返し、宿舎近くでカワガラスやベニマシコを堪能しました。帰路には旭川で優佳良(ユウカラ)織工芸館を見学しました。

3回目 コムケ湖・能取湖(14年8月31日~9月1日)

宿泊:ホテル能取湖荘

秋のシギ・チドリ類観察をメインにオホーツク海方面に出かけました。コムケ湖全体では台風の影響とかで数が

少なめでしたが、宿舎の前には台風を避けてか、クサシギ、ホウロクシギ、アカエリヒレアシシギなど、すぐ近くに多くの、思わぬシギが集まり、大探鳥会になりました。能取湖ではサンゴソウ祭り中で、満開のサンゴソウと野鳥を楽しむことができ、参加者も大喜びでした。濤沸湖でのオジロワシの餌(魚) 捕り・餌運びにも皆さん感激しました。

4回目 大沼公園 (15年6月7日～8日)

宿泊：かんぼの宿大沼

静狩湿原や、シロハヤブサで知られた砂原を経て大沼公園へ。最大の狙いはアカショウビンでした。到着日は、かんぼの宿職員で、道南のアカショウビンやクマガラに詳しい菊地政光さんの案内による観察スポットの下見と、夕食後の菊地さんの鳥談義。翌日、早朝から張り切って出かけましたが、残念ながら声が聴こえたただけでした。大勢の探鳥人でアカショウビンも姿を現さなかったようです。



10年間の宿泊探鳥地

5回目 春国岱・野付半島 (16年5月11日～13日)

宿泊：中標津保養所温泉旅館

札幌から遠い地のため、往路のバス中泊をいれて2泊3日にしました。釧路を過ぎたらものすごい濃霧でしたが、春国岱近くになると晴れ上がり、まずは一安心でした。道の駅スワンからは親子連れのタンチョウが見られました。風連湖ではミヤコドリを全員で観察できました。アカアシシギは繁殖地である野付半島では期待したとおりにあちこちで見られ、「野付半島」の看板の上にも止まるサービス振りでした。

6回目 東大演習林・白金温泉 (17年6月4日～5日)

宿泊：十勝岳温泉ホテル

東大演習林では当時の少し前までそこに勤務しておられた有沢浩さんの取り計らいで、普段は入林禁止の内部に入れてもらい、クマガラを多数観察することができました。昼は熊の足跡や糞を見ながらの食事となり、貴重な経験をしました。夕食後は有沢さんから東大演習林のクマガラの

生態をたっぷりと聴くことができました。白金温泉小島の村では特に珍しい鳥は見られず、少々残念でした。

7回目 利尻島・礼文島 (18年5月2日～5日)

宿泊：町営ホテル利尻 (利尻島)

民宿「はな心」 (礼文)

往路の夜行バス泊を含め3泊4日になりました。利尻島では現地在住の佐藤理恵さんの案内でオタトマリ沼や森林公園を回りました。コマドリやルリビタキもさることながら、オタトマリ沼から見る利尻富士は絶景でした。礼文島での案内人は当会会員の道場優さんでした。50mと離れていない距離でヤツガシラなどを見ることができました。フェリー上からの探鳥もたいへん結構でした。

8回目 焼尻島・天売島 (19年5月3日～5日)

宿泊：布目旅館 (焼尻島)

ホテル大一 (天売島)

正午近くにフェリーで焼尻島に着き、現地で鳥類標識調査に携わっている有田智彦さん(羽幌町職員)に観察ポイントを案内してもらいました。コシアカツバメも見られました。翌日は午前中に天売島に移動。こちらの案内人は写真家の寺沢孝毅さんでした。海底観光船での海鳥ウォッチング、暗くなってから赤岩展望台でのウトウの帰巣観察と、盛り沢山でした。帰る日の早朝にはヤツガシラもお出ましになりました。

9回目 十勝方面 (20年5月10日～11日)

宿泊：十勝ロイヤルホテル (豊頃町)

往路、清水町剣山で多くの夏鳥を見てから豊頃町勇洞沼へ。浅い湖面に立つタンチョウが見られました。十勝太でまたタンチョウ、そしてセイタカシギも楽しみました。翌日は浦幌野鳥倶楽部の会員の方による案内で十勝川の放水路。エリマキシギの夏羽個体が見られ、参加者のほとんどが初めての観察とあって大感激でした。帰途、池田町のワイン城で試飲を楽しみました。

10回目 サロベツ・ベニヤ原生花園 (21年7月4日～5日)

宿泊：豊富温泉ニュー温泉閣ホテル

前号(第157号)に書かせていただきました。どうぞご覧下さい。

なお、各宿泊探鳥会の観察記録などは、それぞれの年の「野鳥だより」に参加者の感想文とともに載せられています。そちらもどうぞご覧下さい。

私はお役ご免にさせていただきましたが、宿泊探鳥会は来年度からも引き続き行われると聞いております。ますます盛況になることを願っています。どうもありがとうございました。

野幌森林公園『自然ふれあい交流館』で 写真展示会を実施しました。

北海道野鳥愛護会発足40周年記念行事の一環として、当会発足時の観察地である野幌森林公園内の『自然ふれあい交流館』の展示スペースをお借りして、今年9月1日より9月30日までの一ヶ月間、野鳥写真展示会を開催いたしました。道立自然公園野幌森林公園は、世界でも数少ない大都市近郊の平地林です。公園内を巡る遊歩道が整備され、多くの人々が利用しており、年間来場者数は5万人を数え、近隣者のみならず、道外からも多数訪れております。

写真展示期間の9月の来館者は、5,600人を数え、多数の方々に観賞いただくことが出来ました。来館者に大変好評をいただいたようで、会館運営者からも「当館にふさわしい企画」と謝意をいただき、次年度以降の継続展示を強く要請いただきました。

出展写真と写真提供者は以下の通りです。また、写真に加え、当会の説明パネル(下図)および過去から現在までの観察記録も展示しました。

出展写真(公園内で観察されたものだけにしました。)

カイツブリ、オオタカ、オシドリ、ツルシギ、アオバト、フクロウ、カワセミ、クマゲラ、ヤマゲラ、モズ、キレンジャク、ミソサザイ、ルリビタキ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、キビタキ、オオルリ、エナガ、シジュウガラ、ヤマガラ、キバシリ、メジロ、アオジ、ウ



写真展示風景

ソ、イカル、ニューナイスズメ、カケス 以上28点

写真提供者(敬称略)

小堀煌治、坂井伍一、品川睦生、高橋良直、田中 陽、田向一彦、山田良造

交流館の要請もあり、次年度以降の開催方法・期間・内容などを幹事会で検討し、会のPR・会員増の一端を担ってゆきたいと考えております。(文責 広報部)

野幌森林公園の野鳥

北海道野鳥愛護会 は1970年に設立され、野幌森林公園で探鳥会(野鳥観察会)が始まりました。

その後40年間、休むことなく野幌森林公園で探鳥会を続け、記録を残してきました。

北海道野鳥愛護会は全道各地で年間27回探鳥会を行っていますが、野幌森林公園は大都市札幌にも近く広大な森林と湖沼などの多様な環境の中に600種にも及ぶ植物が生育し、多数の野鳥が生息する重要な探鳥地と位置付け、現在では年9回の探鳥会を行っています。

この間、約40年で観察し記録した野鳥は 36科106種ですが、森林公園の周囲は宅地や校舎や会社の建設などで環境が変化しました。特に草原の鳥は少なくなり、道内では有数のアオサギのコロニーも姿を消しました。しかし、まだ野幌森林公園は豊かな自然が残っていて、人間には癒しの空間を提供し多くの野鳥が生息しています。

私たち北海道野鳥愛護会はこの自然を大切に今後探鳥会を続けていきます。

このように森林公園には多数の野鳥が生息していますが、なかなか姿を見つけることが難しいものです。

今回は近年、1990～2008年に記録した30科76種のリストを展示し、その中から28種類を会員の写真で紹介いたします。

机の上に用意した北海道野鳥愛護会に関する資料もご利用ください。

「あの鳥は何だろう、名前を知りたい」と思ったら「入会案内」を一読の上、ご一報ください。

北海道におけるアカハラの繁殖期の分布

美唄市 藤 巻 裕 蔵

北海道で繁殖するツグミ属 (*Turdus*) の鳥類はマミジロ、クロツグミ、アカハラの3種である。3種とも夏鳥で、森林性の鳥であるが、生息状況は種によって異なっている。マミジロは他の2種より高い標高に生息し、クロツグミは東部で少ないことが経験的に知られている。今回はこれまでの自分の調査結果と各種報告書などの記録を用いて、アカハラの繁殖期の分布についてまとめた。次回はクロツグミについて述べ、これら2種の生息状況について比較する。

調査方法、使用したデータ、まとめ方については、カケス(121号)やコムクドリ(130号)の場合と同じなので省略する。2009年までに調査した区画(5×5km)の数は854、調査路数は961である。分布図の作成では全ての記録を用いたが、生息環境別と標高別の出現率については上記の区画と調査路で調べた結果だけを用いた。

分 布

図1に、10km四方の区画を単位として繁殖期のアカハラの分布を示した(観察結果は5×5kmの区画で記録しているが、図が細かくなるので10km四方で表示)。

アカハラは石狩平野や十勝平野などその大部分が農耕地や住宅地となっている平野部から山間部にかけて広く生息しており、ほぼ全域に分布していると言える。北部やオホーツク海側でアカハラが記録されていない区画が目立つが、これは短時間・短距離の調査をした場合が多いためである。

生息環境

生息環境別に出現率(全調査路数に対するアカハラが観察された調査路数の割合)をみると、アカハラはハイマツ帯では出現していないが、それ以外の森林で出現率は59～88%で(表1)、どの森林タイプでも高かった。また、アカハラは森林以外の環境でもかなり観察され、出現率は農耕地・森林で71%、農耕地で67%と高く、住宅地でも32%であった(表1)。アカハラは樹上の比較的低い位置に巣を造り、農耕地内の残存林、防風林、樹木のある庭でも繁殖することがあるので、森林以外でも出現率が高くなるのであろう。

標高別の出現率については、ハイマツ林と出現率の低かった住宅地以外の環境についてみることにする。出現率は、



図1. 北海道におけるアカハラの繁殖期の分布

一つの区画は約10km四方で、1/25,000の地形図に相当する。

●=生息が確認された。○=調査をしたが観測されなかった。・=未調査。

200m以下では55%、201～400mで75%、401～600mで67%、601～800mで52%、801m～では15%で、比較的高い標高まで生息しているが、出現率は標高801m以上で急に低くなる。

観察個体数

調査路 2 km当たり幅片側25mの範囲で数えられ

た平均個体数は、常緑針葉樹林で0.5羽、針広混交林と落葉広葉樹林で0.6羽、カラマツ人工林で1.3羽、農耕地・林で0.7羽、農耕地で0.3羽、住宅地で0.1羽であった。観察個体数は出現率の場合と同じように、森林以外の環境である農耕地・林では同程度で、農耕地でもその半分くらいの値であった。

表 1. アカハラが生息環境別・標高別の出現率 (%)

生息環境	調査路数	標高 (m)					全体
		～200	201～400	401～600	601～800	801～	
ハイマツ林	12	—	—	—	0	0	0
常緑針葉樹林	17	77	100	100	0	67	64
針広混交林	153	57	65	65	63	21	59
落葉広葉樹林	197	75	75	71	50	0	73
カラマツ人工林	24	80	91	100	—	—	88
農耕地・林	238	68	84	57	0	—	71
農耕地	279	66	73	50	—	—	67
住宅地	32	29	100	50	—	—	32

まとめ

アカハラは北海道全域にほぼ一様に分布し、おもに標高800m以下に生息しており、森林の鳥であるが生息環境では森林のほか林のある農耕地には森林と同程度に生息しており、農耕地のような環境でも少なくなく、生息環境の幅の広い鳥である。



野幌森林公園

2009. 7. 12

【記録された鳥】 カイツブリ、アオサギ、トビ、オシドリ、キジバト、アオバト、ツツドリ、アマツバメ、カワセミ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、メジロ、アオジ、イカル、ニュウナイスズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上30種

【参加者】 阿部真美、井上公雄、井上詳子、今村三枝子、牛込直人、大表順子、岡本健太郎、小西美美枝、小堀煌治、後藤義民、品川陸生、田中 洋・雅子、成澤里美、蓮井 肇、畑 正輔、浜野秀保・登茂子、原 美保、樋口孝城、辺見敦子、松原寛直・敏子・ゆたか、柳川 巖、山本和昭、横山加奈子

以上27名

【担当幹事】 小堀煌治、成澤里美

石狩川河口

2009. 8. 16

札幌市清田区 中村真奈美

この度の探鳥会は、シギ、チドリ類などは残念ながらあまり見ることが出来ませんでした。思いがけずニホントカゲの幼体を捕まえることができ、子供ともども楽しませていた

いただきました。また、何人もの方々が写真を撮ったり、関心を寄せて見ていただけたことも私としてはうれしい出来事でした。どんな生き物もちょっと先入観にとらわれずに観察したりすると、行動やしぐさなど意外と面白い発見があるものです。ニホントカゲの光沢のある青い尾、黒色を基調とした体に5本の金色の縦線がくっきりと入ったカラーリングは幼体のうちだけの特徴です。成体になると薄い褐色に不明瞭な黒線が残る程度の地味な色合いとなってしまいます。鳥は成鳥になるときれいな色彩をもつ雄も多く、この点は逆ですね。自然界に存在する不思議であざやかな色合いをもつ生き物達と出会えた時の感激は何度味わっても良いものです。図鑑などを眺めながら、こんな鳥に会ってみたいという思いに駆られながら探鳥会に参加し鳥を探すことは、子供の頃、わくわくしながら虫やカエルを捕っていた時の気持ちと同じような感覚で、大人になってもこのような気持ちを味わえることに幸せを感じます。色々な生き物に目を向けると、街中のいつと同じ道にも、鳥の姿を見つけたり、虫の声が聞こえたりと、とても楽しいものです。そんな時、私は人よりちょっと楽しみを多めに味わっている気がして、とても得した気分になります。これからもこのわくわくする気分を味わいたく、また子供には自然の中に楽しいことがたくさんあることを気付いてもらいたく、探鳥会に参加させていただきたいと思えます。

【記録された鳥】 ウミウ、アオサギ、トビ、トウネン、ミユビシギ、ソリハシシギ、チュウシャクシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ヒバリ、ハクセキレイ、ノビタキ、カワラヒワ、ハシボソガラス

以上14種

【参加者】 朝倉佳文、今村三枝子、岩井 茂、白田 正、内山純一・雅子、大橋 晃、栗林宏三、小林一介、小林流理、

斎藤 洋、佐藤ひろみ、品川睦生、島崎康広、高田征男、高橋良直、竹田芳範、辻 雅司・方子、徳田恵美、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、中村真奈美、中村怜央、蓮井 肇・敏恵、濱野由美子、原 美保、樋口孝城・陽子、丸島 均、丸島道子、紅葉昭彦、百々瀬 満、山本和昭、横山加奈子

以上38名

【担当幹事】佐藤ひろみ、中正憲信

鷓川河口

2009. 8. 30

札幌市西区 北山 政人

2009年8月30日鷓川探鳥会。晴天とはいきませんが、雨に当たることは無いだろうと、鳥の方にも期待して参加しました。シギ、チドリ類はもとより、湿地や河畔林など多様な自然環境を有する鷓川河口とその周辺は様々な鳥たちに出会えるすばらしいフィールドだと思います。

8月も半ばを過ぎると、早くも鳥の世界では渡りをはじめの種類の種類が出てきます。北極圏などから南半球を目指す、シギ・チドリ類だけでなく、東南アジアなどで冬を越すスズメ目の鳥たちも動き始めます。この日見たショウドウツバメの群れも秋の訪れを徐々に感じさせる光景ですし、ムクドリが大きな群れを作るのも、非繁殖期に良く見られる行動なので、夏から秋への季節の変わり目らしい風景でしょう。河口へ向かう途中でノビタキやオオジュリン、ホオアカなどの草原の小鳥たちが見られます。今年生まれと思われる個体も見られました。

上空をやや小型のタカ類が飛んでいます。ツミかハイタカか？う～ん、ツミならば雌か、などと思いつつ観察し、証拠写真を撮ります。やはり、初列風切外側の分離が6本、尾羽も長く、胴も細身で長い、喉の下の一本線も目立たないなどの事柄からハイタカで間違いなし、と結論を出しました。個人的には鳥を美しく撮ってみたい、というよりは、識別の為のツールとしてデジタルカメラを活用する場合があります。個人の楽しみとして猛禽類を観察する時でも、記録を証拠写真に残す場合や、同じ種類でも個体識別をするときにも有効です。

草原の猛禽、チュウヒが見られました。このタカは羽色に変異が多く、様々なバリエーションがあるので、前記したように、じっくり観察して写真を撮って、文献などで調べてみると、とても奥深く面白いです。北海道の者としては夏季に平地の草原や湿地帯などでよく見るタカですが、日本国内の繁殖地は北日本の限られた場所で、本州以南では冬鳥として見られる方が多いです。

鷓川の中州になっている所にウの群れが。さてウミウかカワウか、と見てみますが、嘴の部分がよく見えません。いちばん近い所から見てみますと、どうやらカワウのようです。牧草地の上空を飛びまわっているウが数羽います。

ウミウよりも尾羽が長く、飛んだとき翼の位置が胴の中央にあり、嘴の特徴もカワウです。以前は北海道に居ない、もしくは僅かな記録がある、という状況でしたが、現在はかなり異なってきています。北海道でも繁殖するものいます。春に移動中と思われる群れが見られるようになり、どうやらそれらが増えているように思えます。今年の春もカワウの群れを鷓川と厚真川にて観察しています。北海道のカワウの状況はこれからどうなっていくのでしょうか？

さてメインのシギ・チドリ類ですが、数は少ないながら、楽しめました。種類はそれなりに出てくれました。この時期にアオアシシギの声を聞くと季節の変わり目を改めて実感します。海上に目をやると、漁網の浮の上にアジサシが数羽います。頭部が嘴の所まで黒いのでアジサシの成鳥夏羽です。この時期、北海道でも渡りの途中のコアジサシ、あるいはサハリンなどで繁殖するコシジロアジサシが稀に見られるのですが、やはり何度良く見てもアジサシでした。誤認や不鮮明な写真を根拠に珍鳥の記録を作りあげるの、許されない事ですが、文献や信頼できる情報をもとにして、良い意味で普段見られない鳥を見つけよう、という希望は、常に持って鳥見を楽しみたいと思っています。

【記録された鳥】カワウ、ウミウ、アオサギ、トビ、チュウヒ、ハイタカ、オオタカ、マガモ、カルガモ、メダイチドリ、トウネン、オグロシギ、オオソリハシシギ、アオアシシギ、キアシシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、アジサシ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、コヨシキリ、ホオアカ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上30種

【参加者】青野和子、阿部真美、赤沼礼子、五十嵐 徹、岩崎孝博、白田 正、大表順子、門村徳男、後藤義民、小堀煌治、岸谷由美子、北山政人、小松正幸、斎藤 洋、品川睦生、島崎康広、鈴木順子、高橋良直、田中哲郎・洋子、田中 陽・雅子、辻 雅司・方子、中正憲信、成澤里美、蓮井 肇、畑 正輔、濱野由美子、樋口孝城、広木朋子、真壁スズ子、松原寛直・敏子、宮森俊治・美保子、柳川巖、山田良造、山本昌子、横山加奈子、吉中宏太郎・久子、鷲田善幸

以上43名

【担当幹事】門村徳男、樋口孝城

野幌森林公園

2009. 9. 6

【記録された鳥】カイツブリ、ハイタカ、オシドリ、マガモ、キジバト、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ミソサザイ、ヤブサメ、センダイムシクイ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、ハシブトガラス

以上20種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、伊東峰子、井上公雄、井上正吉・詳子、上野紘史、内木克巳・靖子、大嶋 潤、

大表順子、小西峰夫・美美枝、小林英明、小松正幸、今善三郎、後藤義民、志田憲治、品川睦生、清水朋子、高橋良直、田中 陽・雅子、田中志司子、道場 優、成澤里美、二反田公仁子、蓮井 肇、浜野チエ子、原 美保、松原寛直・敏子、百々瀬 満、山本和昭、やまもとまなぶ、山本昌子、湯川加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子 以上40名

【担当幹事】品川睦生、成澤里美

石狩川河口

2009. 9. 20

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、トビ、オジロワシ、ハヤブサ、コガモ、マガモ、トウネン、ウミネコ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ヒバリ、ハクセキレイ、ノビタキ、カワラヒワ、ハシボソガラス

以上17種

【参加者】赤沼礼子、池田政明、井上詳子、今村三枝子、岩崎孝博、大表順子、河野美智子、小西峰夫・美美枝、栗林宏三、後藤義民、品川睦生、島崎康広、高田征男、高橋きよ子、竹田芳範、辻 雅司・方子、長尾保秀・由美子、中嶋慶子、成澤里美、中正憲吉・弘子、蓮井 肇・茜、原 美保、紅葉昭彦、松原寛直・敏子、松木ゆう子、柳川 巖、山上正宏、山本和昭、横山加奈子 以上35名

【担当幹事】中正憲吉、横山加奈子

チュウヒゆったり、宮島沼

2009. 10. 4

札幌市中央区 白田 正

10月4日、探鳥会の定刻は10時でしたが、いつもの通り少し早めに出掛けてみました。到着早々、おー！出ましたよ。対岸を悠然と飛ぶチュウヒです。まだ若い、頭部から肩羽にかけて色彩の薄い個体でしたが、美しいV字飛行をたっぷりと披露してくれました。おかげで、古人のおっしゃった「早起きは三文の得」をしみじみと実感できました。

チュウヒの飛ぶ姿は、宮島沼のような開けた湿地環境でよくお目にかかる光景ですが、いつもながらの地面をなめるようにして飛ぶ雄姿は何とも格好良く、じっくりと堪能させていただきました。そして、時には停空飛翔、それもいわゆる羽ばたきながら行う「ホバリング」ではなく、羽ばたきを伴わずに空中に停止する「ハンギング」、をして私たちの目を楽しませてくれました。それは、安定した風の中で、風上に向かって微妙にバランスを取り、あたかも一瞬無重力状態になったかのように、優雅に浮かぶのです。強風の中、海岸などの断崖上でノスリが行っているのを観察する機会が多いのですが、このような「そよ風」と呼んでも良いような穏やかな風の中で、地上すれすれをこうして空中に停止している姿は、なんとも不思議な超自然現象

を目の当たりにしているようでした。空はあくまでも高く澄み渡り、秋の陽射しは肌に心地よく、とっても柔らかかったです。そして、すでに黄金色になりかけている草原を飛ぶチュウヒの姿を望遠鏡の視野に捉えて追いかけていると、何だか自分が鳥になったような気がしてきました。

この日はこのようにして、少なくとも3個体のチュウヒが何度も出現し、大いに楽しむことが出来ました。また、チュウヒに限らず、マガンをはじめこの季節ならではの秋の渡りのドラマチックな場面を何度も味わいました。

やはらかき

優しき^{ひかり}陽光

秋色に

野は輝きて

チュウヒたゆたふ

【記録された鳥】カイツブリ、ウsp、ダイサギ、アオサギ、トビ、チュウヒ、ハイタカ、ヒシクイ、マガン、カリガネ、マガモ、コガモ、カルガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ミコアイサ、ユリカモメ、キジバト、ヒバリ、シジュウカラ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上30種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、今村三枝子、岩崎孝博、白田 正、岸谷美恵子、北山政人、栗林宏三、後藤義民、小堀煌治、佐藤ひろみ、品川睦生、高橋良直、田中 陽・雅子、道場 優、蓮井 肇、畑 正輔、浜野チエ子、原 美保、樋口孝城、松原寛直・敏子、山田良造、山本和昭、山本昌子、吉中宏太郎・久子 以上28名

【担当幹事】北山政人、佐藤ひろみ

野幌森林公園

2009. 10. 11

江別市大麻 辺見 敦子

野鳥チェックリストの天候の欄に「いろいろ」と書きました。今日は晴れあり、曇りあり、雨あり、そして極めつけは、今秋はじめてと思われるあられも降りました。でも、それにもめげず出発。入口から入ると小鳥の鳴き声がひびき、足止めされました。カラの鳴き声かしら？などと、あたりを見回していると、もうベテランの方々の間で、ムギマキではないか、キバシリがいるよという声。しかし、不勉強な者には、ムギマキとはどんな鳥かわからず、右往左往、結局確かな鳥の姿を確認できないうちに再出発。このように観察会は続きました。

木の葉も落ちかけていて、以前より見やすくなってきたとはいえ、落ち葉を小鳥と見まちがえることもあり、初心者には難しいものです。その心をなごませてくれるのが、紅葉の始まった木々の葉でした。陽の当たるところから色

づき始めたカエデや、脱色したコシアブラの白っぽい葉が青い空に映えます。足元には茶色の大きな朴の葉やハリギリの葉がガサゴソ音を立て、桂のいいにおいもします。

結局、28種確認できた中で、自分が見られたのは10種位で、不完全燃焼でした。それは当然です。参加もあまりせず、毎日の忙しさにかまけて不勉強で、鳥の声も区別できず、鳥の姿も識別できないんですから。

だけど、時間があれば参加するのは、会のみなさんの鳥に対する純粋な愛情と、温かい言動が心をなごませてくれるからです。仲間だなあと感じる心地よさがあるからです。

熱心ではなく、双眼鏡の使い方も今いちですが、細く長く楽しんでいきたいと思えます。

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、オオタカ、マガモ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、アカハラ、マミチャジナイ、ツグミ、キクイタダキ、ムギマキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、カシラダカ、アオジ、アトリ、カケス、ハシブトカラス 以上27種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、井上公雄、今村三枝子、工藤光恵、後藤義民、小西美美枝、品川睦生、須田 節、高田征男、竹田芳範、田中 陽・雅子、辻 雅司・方子、辻田捷紀、浪田良三、畑 正輔、浜野チエ子、早坂泰夫、原 美保、引野知恵子、辺見敦子、真壁スズ子、松原寛直・敏子、室野文男、山本和明、横山加奈子 以上29名

【担当幹事】後藤義民、品川睦生

野幌森林公園

2009. 11. 1

【記録された鳥】ハクチョウsp.、マガン、アカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、ウグイス、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、ハシボソガラス 以上15種

【参加者】小西美美枝、小山久一、道場 優、畑 正輔、松原寛直・敏子 以上6名

【担当幹事】道場 優、松原寛直

ウトナイ湖

2009. 11. 8

札幌市北区 辻 方子

朝日がまぶしく、今日はいいカモ！とダジャレ混じりでウキウキ出発。ところがウトナイの空は曇って、湖も薄く広がるモヤの中でした。

でもそこは鳥を愛してやまない皆さんのこと、次々に鳥をチェックです。おなじみのオナガガモ、オオハクチョウ、コブハクチョウは岸辺に集まりウロウロ。コハクチョウも発見。オオハクチョウとは嘴の柄が違うのですね。奥には

100羽ほどのオオバンが群れていて見ごたえ十分です。また、対岸には30羽強のダイサギがスラリと佇み、時折一斉に舞い上がっては美しい飛翔を見せてくれました。来る途中に立ち寄った長都沼でもかなりのダイサギを見ましたし、家（北区）の近くでもこの頃よく見かけます。ダイサギの当たり年なのかしら？更に奥にヒシクイ、マガンの団体さん。人気のヨシガモもナポレオンハットでお出まします。ミコアイサはまだ茶色の顔でちょっとカイツブリ風。シックな色合いで、私の好きなオカヨシガモもいたそうなのですが私は見られずガッカリです。学名は「騒々しいカモ」とか。そんなにうるさいの…？

モヤにもかかわらず猛禽類を次々と同定していくのは、猛禽スペシャリストの幹事さん。その眼力には「恐れ入りました」の一言です。おかげでオジロワシ、チュウヒ、ノスリ、ハイタカなどをじっくり観察できました。

いつもながら幹事の皆さんの「ここが〇〇で、あそこが××だから、△△鳥」という的確な説明は大変勉強になります。

すっかり葉を落としてわびしくなった湖畔林の中で、ツルウメモドキの絡んだ木だけはオレンジの花がさいたよう。その中をハシブトガラがピュンピュン飛び回っていました。

見通しの良くなったおかげで木々の間に巣も発見です。枝にボンと危うげに載ったもの、枝にしっかり絡ませた頑丈なもの、人目に付きやすい木道のすぐわきにかけてのものなど、それぞれ個性的。製作者を想像しながら観察できるのもこの季節ならではのしょうね。

肌寒く、感想文まで大当たりしてしまいましたが、鳥の魅力を改めて実感した一日でした。幹事さん、お世話になりました。

【記録された鳥】ダイサギ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、ハイタカ、ノスリ、オオハクチョウ、コハクチョウ、コブハクチョウ、マガン、ヒシクイ、マガモ、コガモ、ヒドリガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、オオバン、オオセグロカモメ、アカゲラ、キセキレイ、ハクセキレイ、ツグミ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上34種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、今村三枝子、岩崎孝博、大表順子、北山政人、河野美智子、後藤義民、小西峰夫・美美枝、小堀煌治、小松正幸、品川睦生、清水朋子、高橋良直、田中哲郎、田中 陽・雅子、辻 雅司・方子、中正憲倍・弘子、浪田良三、蓮井 肇・敏恵・茜・かおり、畑 正輔、浜野チエ子、濱野由美子、原 美保、樋口孝城、平野規子、真壁スズ子、松原寛直・敏子、山田良造、山本和昭、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子、鷺田善幸 以上44名

【担当幹事】北山政人、鷺田善幸



【小樽港】2010年1月17日(日)

札幌からの貸切バスを利用して行きます。探鳥コースは日和山灯台付近、祝津漁港、高島漁港、フェリーターミナルなどで、海ガモ類、カモメ類、ウミスズメ類などが中心です。アビ類も見られるかもしれません。

以下の要領で行いますので、参加希望者は申込み下さい。

集合場所 札幌駅北口(中央)「鐘の広場」

集合時刻 午前8時

帰着時刻 午後4時頃

定員 45名

参加費 1,500円

申込先 岩崎幹事(Tel 011-778-8482)

1月6日から電話で受け付けます。受付時間は午後5時から8時までです。定員になり次第締め切ります。

その他

- ・小樽駅で小休止してから探鳥コースに入ります。
- ・フェリーターミナルで昼食を取ります。
- ・往復とも途中乗車・下車はできません。

【野幌森林公園】2010年2月7日(日)

雪に覆われた森は、厳しい寒さの中で近づく春を待っています。この時期に見られる鳥たちは、ツグミ、アトリ、マヒワなどの冬鳥と、留鳥のアカゲラ、コゲラ、キバシリ、キクイタダキ、カラ類、そして冬によく見られるウソ、シメ、カケスなどです。フクロウにも会えるかもしれません。

集合 午前9時 野幌森林公園大沢口

交通 新札幌駅ターミナル発

夕鉄バス(文京通西行)大沢公園入口下車

JRバス(文京台循環線)文京台南町下車

各徒歩5分

【円山公園】2010年3月7日(日)

日中の日差しにも春が感じられる季節を迎えています。キツキ類、カラ類などのいつも見られる鳥に加え、ツグミ、カワラヒワ、アトリ、ウソ、シメなどが見られます。さえずりも聞かれ始めます。午前中で解散の予定です。

集合 午前9時 円山公園管理事務所前

交通 地下鉄東西線 円山公園下車 徒歩8分

【ウトナイ湖】2010年3月21日(日)

日本各地やさらに南で冬を過ごしたガン・カモ類がこの時期群れをなして北の繁殖地に渡りはじめます。ウトナイ

湖はこれらの渡り鳥の中継地として賑わいを見せ始めます。多くのカモ類の他、オジロワシやオオワシなども観察されます。集合場所からサンクチュアリまで歩き、サンクチュアリ建物内で昼食となります。まだまだ寒い時期ですから、暖かい身支度でご参加下さい。

集合 午前9時30分 野生鳥獣保護センター駐車場

交通 千歳空港発のバスがあります。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具などをお持ち下さい。

☆何れの探鳥会も悪天候でない限り行います。

☆探鳥会の問い合わせ 白澤 昌彦 011-563-5158

鳥民だより

◆新年講演会のご案内◆

・日時 2010年1月9日(土) 13:30~16:30

・場所 札幌エルプラザ内

札幌市男女共同参画センター 4階大研修室

北区北8条西3丁目(札幌駅北口より徒歩3分)

・講師 牛山 克己氏

(宮島沼水鳥・湿地センター)

・演題 ごはんを食べてマガンを守る!?

~石狩平野を渡るガン類の保全~

・講演内容:「雁 雁 渡れ 大きな雁は先に 小さな雁は後に仲よく渡れ♪」童歌などに頻りに登場する雁は、古くから農村を代表する渡り鳥として親しまれていました。しかし、農業の近代化、湖沼環境の消失と劣化、地球温暖化など、ガン類を取り巻く環境は急速に変化しています。現状ではガン類の未来は決して明るいものではありませんが、実は、案外身近な所に解決の糸口が転がっているのです。その他にも、ガン類の気になるあんな話やこんな話をご紹介します。春のガン・ウォッチングが待ち遠しくなること間違いなしです!!

・野鳥写真映写(15:20ぐらいから)

皆さんの持ち寄った野鳥写真を映写します。問い合わせは高橋幹事まで(BRB32264@nifty.com)。

・参加費 500円

・懇親会 新年講演会終了後、煉瓦亭(北1西3、三和ビル地下)で行います。会費は3,500円です。前もっての申し込みは不要です。どうぞご参加下さい。

【新しく会員になられた方々】

秋本 秀人 札幌市南区

鈴木 立士 北広島市

【北海道野鳥愛護会】年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>